

防災歳時記 (12)

—山が燃える—

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮澤 清治

梅も桜もともに咲く

北国では、4月から5月にかけてが花の季節だが、雪とはまだ縁が切れない。春の遅い北国の風情を次のように謡う。

花が咲いたと、都のたより

こちら雪だと返す文

(山形県新庄節)

同じ東北民謡でも、こちらは春らんまん、野焼きの火を謡う。

あちらこちらに野火つく頃は

梅もサクラもともに咲く

(秋田県本荘追分)

北国の春は爆発的にやってくる。ある日



写真1 山形県新庄市郊外を流れる最上川

突然、気温が上昇して屋根の雪が解け、音をたて屋根から水が落ちはじめる。これが春の到来の音だと人は言う。

2月から3月にかけて、西日本では梅、桃、桜の順に花が咲く。これらの花前線が、北上して中部地方や北国にさしかかると、先行した梅前線が寒さのために足踏みする。4月半ばになると、北国では爆発的に気温が上昇する。すると、後続の桃、桜前線が梅前線に追いつき、3種の花が一緒に咲くようになる。

福島県三春町は、一説には梅、桃、桜と一緒に咲くので“三春”の名がついたという伝承がある。ところが、気候が変調だと、「三春現象」が暖地でも起こる。

昭和59年(1984)は、まれにみる寒冬大雪の年で、太平洋側でも雪が数回も積もった。東京の桜の開花は、平年より13日も遅れて4月11日で、遅咲きの新記録となった。この年は、寒さのあとに急に春がやってきたので、東京でも神戸でも梅、桃、桜、梨と一緒に咲き誇り、百花練乱の春となった。人々は生まれて初めて見る珍現象だと喜んだ。

野火は、春の風物詩である。枯れ草は、紅

蓮の炎をあげて燃え上がる。広大な野焼きは華麗な火の宴でもある。火が一段落してチロチロと燃えていても、風向きによって急に火が広がる。春の強い日ざしの下では、火がよく見えないので、油断できない。

風が急に吹きだし 9 火が走る

昭和 58 年(1983)4 月 27 日午後、東北地方に発生した同時多発的な山火事はいつまでも記憶に残る。青森・岩手・宮城・福島など東北 6 県の山林では、36 か所で山火事が発生し、焼失面積 9 千ヘクタール、死者 1 人、被災者約 230 人を数えた。特に岩手県久慈市の山火事は、三陸海岸の 5 集落を灰とがれきに変えた。暗い冬の季節に耐えてきて、やっと花の便りを聞いたばかりだったので、よけいに痛ましかった。

26 日まででは、異常な乾燥が続き、山火事が起こりやすい状態だった。ところが 27 日

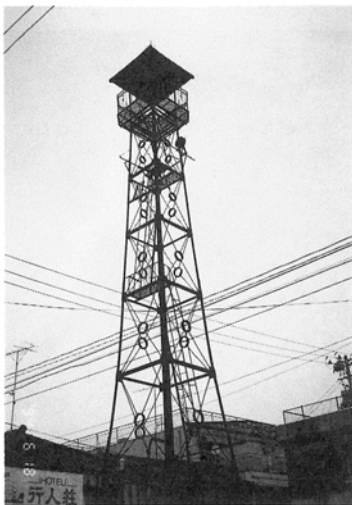


写真 2 火の見やぐらの見える風景
(福島県浪江町)

の昼ごろから、人々の虚をつくように突風が吹き始めた。飛び火が盛んに起こり、火災はどんどん拡大した。

朝のうちは、放射冷却で冷え込んだ空気が地面を覆い 9 風は穏やかだった。昼間になって、強い日ざしで地面が熱せられると対流が起こり、空気が上下にかき混ぜられた。すると、上空の強風が一気に下りてきて、地上で突風が吹き出したというわけ。

フェーン現象によって奥羽山脈を越えてきた乾燥した西風であったので、火を走らせる結果となった。

気象学者は、急に吹き出した危険なこの風を「熱対流混合風」と呼んだ。われわれの先祖は、このような現象を早くから気づき、ことわざとして残した。

○星がキラキラとままたくと、翌日風が強くなる

○北風と夫婦喧嘩は日が沈むと止む

○西風と日雇いは日いっぱい

星がまたたいて見えるときは、上空で風が強い証拠である。強風が密度の大きい空気と小さい空気を次々と運んでくる。この空気の層を星の光が通るとき、強さや色を変化させるので、星がまたたいて見える。翌日、日射で地面が暖まると、空気の対流が起きて、上空の強風が地上に下りてくるのである。太平洋側の地方で冬に吹く北風(からっ風)は、日没になると地面付近が冷え込むので空気の対流がなくなり、風が弱くなる。

からっ風は、場所によっては西風となる。

雪が消え、花の訪れとともに山菜摘みやハイキングの人々がどっと山に入る。山火事の多発する季節の「マッチ一本」に最大限の注意をしたい。